

「恥」のもつ意味

——『万延元年のフットボール』論——

鳥居明子

(1) 恥

大江健三郎の『万延元年フットボール』という長く入り組んだ小説の受けとめ方は、人それぞれであろうし、また様々な読みとりの可能性を秘めている作品でもある。

私の場合、作中で「恥」、あるいは「恥じる」「恥辱感」といったモラルの面からみて負の意味をもつ一連の語が繰返し用いられていることに興味をもった。

この小説の語り手である蜜三郎は、絶えずモラルを気にしてはいるものの、浮かびあがろうとする意欲を

失った人物として描かれている。しかし、そのような人物像を示すためというだけでは、この頻度は説明がつかないように思う。数例を次にあげれば、

○子供の排泄は憐れにも長ながとつづく。僕は同情して、かれとおなじ焦だちと怯えと恥かしさにとらえられる。(七五ページ)

○寝とられた男の恥の実体を眼にすることによって、若者はあたかも自分自身のことのように恥かしくてたまらなかつたのだ。そのように理解すると恥のピンポン球は狼狽した僕に撃ちかえされた。僕の眼のなかには湿った恥の火で埋めつくされた。(三四一ページ)

○しかし、いま屈伏した谷間の民衆が悩んでいる「恥」は憎悪のバネに転化しうるたぐいのものではない。陰湿で厭らしい無力な「恥」だ。(四一五ページ)

作中、とくに前半において、さりげなく心理描写に挿入されていた様々な「恥」は後半に至るにつれて、二種類に限定されていくように思える。

ひとつには、鷹四と菜採子の姦通をめぐる蜜三郎の恥。もうひとつは、ジンの台詞「村の人間みなが平等に恥をかいて、結構なことですが！」(三〇七ページ)を契機に、蜜の頭の中で具体化される「谷間のすべての人間平等の恥」^②、つまり鷹が暴動(スーパー・マーケットの略奪)により谷間の人間それぞれに分担させた「恥」である。

どちらも、小説の展開の上で、重要な役割を担っている。根所家の生き残った兄弟、蜜三郎と鷹四は二種類の恥をはさんで対立を深め、ついには互いに「肉親関係を保持して実在していることを激甚に恥じ(三九一ページ)」るようになるのである。

このように小説の後半部の中心軸としての働きをしていること、一語に二重の意味が込められていること、

以上を見れば意図的に構想に組み込まれたことは明らかであろう。

前半部では、慎重に細部に紛れこませ、積み重ねの効果を狙ったのではないだろうか。無意識でとは考えられない。めだつて作爲的な文脈(後述するところの異化された表現)の中で用いられていることが多いからである。

小説の文体を戦略として意識している大江が、「恥」を連呼することにより、読み手に何を印象づけようとしたかを、私はこれから考察してゆくつもりだ。

(2) 人間の威厳と恥

本論に入る前に、まず大江個人にとって「恥」という語が、とくべつな思いいれのある重みを持つ言葉であることを示しておきたい。

大江は、初期のエッセイの中で「モラル」という言葉をたびたび用いるが、「恥」が彼のモラルの世界で重要な意味をもつことは、『ヒロシマ・ノート』^③(Ⅳ人間の威厳について)から察せられる。

彼は、この文章のなかで、「人間の威厳」について——とりわけ広島で出会った人間的な威厳をもつ人々

について語るのだが、「威厳」と「恥」という二つの言葉が彼のモラルの世界に定着するまでの経緯を、自身の少年時代を振り返りつつ述べているのが注目される。

それによれば、大江は子供の頃父親とある映画を見てから、「恐ろしいジレンマ」に悩まされたのだという。彼を震撼させたのは、「敵軍の捕虜となった若い兵士が、拷問にあつて自分の軍隊の機密をしやべつてしまうことを恐れ、ただちに自殺するというエピソード」であり、またそれ以上に「自殺しないでも、白状させられたあと結局殺されたよ」という父親のシヨッキングな言葉であつた。

それからは、「自分が屈伏しないで死ぬタイプか、屈伏したあと殺されるタイプか」と考えることが、長い間重要な選択の問題、ジレンマとなつて、彼の心から離れなかつた。

その後、大江は大学生となりフランス文学を学ぶようになつて、ひとつの奇妙な発見をした。それは威厳 (dignité)、屈辱あるいは恥 (humiliation, honte) という語が、フランス文学では頻繁に使われ、しかも「作家と読者の胸を刺す、人間的なモラルの、もつとも鋭い剣」であるのに対し、日本文学では冷遇されている

という事実だつた。
つづけて彼はいう。

そこで僕は、自分の子供のころからのジレンマに、フランス文学からの独特な意味づけをまなんだのであつた。次のように僕はジレンマに言葉をあたえた。屈辱、恥をうけいたあとむなく殺されるタイプの自分は、いつ、威厳とともに自殺するタイプにか
わることが出来るだろうか？

さらに彼は次のように言いきる。

このようにして僕にやつてきた、威厳、屈辱および恥という言葉は、現在の僕にとつてもなお、僕自身のモラルの世界のもつとも基本的な用語である。

さて、大江自身の言葉から、「恥」に対応するものとして「威厳」という概念を得た。

彼にとつて双方とも重要な言葉であるのに、「恥」だけが頻出して、「威厳」は表面上にまったく出てこない。なぜ、このような差が生じたのか。ここに大江の何らかの意識が反映していると見てもよいのではな

いだろうか。

(3) 小説の方法

大江が、この一篇の小説で、何を語ろうとしたのか、より正確に言えば、何を読み手に喚起しようとしたのか、大江の方法論を参考に考えてみよう。

大江は、しばしば草稿の内容や構想から最終稿に到る過程をエッセイの中で明かすが、まとまった小説理論として『小説の方法』⁽⁶⁾がある。

『小説の方法』は、ロシア・フォルマリズムやバフチンの影響がまとめられ、「異化」「グロテスク・リズム」等の概念を軸に、大江の方法論が述べられていくのだが、『万延元年のフットボール』を読みとる際にヒントとなりそうな事柄を多く含んでいるので、引用も交えつつ、その概要を掴んでおきたい。

(a) 異化

まず、「異化」についてであるが、大江は「日常・実用の言葉が『異化』されることによって、文学表現の言葉になる」のだといい、シクロフスキーの「異化」の定義を引用している。⁽⁸⁾

芸術の手法（^{プリョーム} *приём*）は、ものを自動化の状態から引きだす異化（^{アストラニエーニエ} *оотрапение*）の手法であり、知覚をむずかしくし、長びかせる難法な形式の手法である。

また、文体について大江は次のようにいう。

すなわち、ある文体が「自動化作用」におちいり、ものとしての、あるいは言葉のかたちとしての手ごたえをあたええなくなった時、その文章に文体としての抵抗感を回復させるために、現にある文体からのパロディ的な展開が必要である。それは文体レヴェルでの「異化」と呼びうるものであろう。⁽⁹⁾

この部分は、あまりに『万延元年のフットボール』の文体、とくに一章の出だしの難解さ、のちに大江自身が「読み手を拒むような性格がそこにあるのではないか？」と惧れる気持をもつほど、文体としての抵抗感が濃厚なあの文章にあてはまりはしないだろうか。

(b) 想像力のダイナミズム

大江は次に、想像力的なものを喚起する言葉の仕掛けについて語っている。

○小説の一節を書くことは、そこに想像力的なものを喚起する、言葉による媒体をつくりだす行為である。小説の実質とは、言葉によってそこに構成された、想像力的なものを読み手に呼びおこす仕掛けである。

○想像力の機能の働らきかたの、運動の軌跡はダイナミズムを特性とする。このダイナミズムが、小説を構成するさまざまなレヴェルの言葉の仕掛けによってつくりだされ、ついには想像力的なものの爆発的な喚起作用にまで展開するにいたる。

実際にこの想像力のダイナミズムを、小説を書く作業にどのようにして組み込むのか、また本当に自分の書く一節が想像力的なものを読み手に喚起しうるのか、という疑いをどう乗り越えるのかについては、言葉で書きあらわした事物に「ものとしての手ごたえをあたえるべくつとめる」こと、すなわち「異化」された表現を達成することだと述べ、更につづけて、

○あるイメージを（略）いいかえれば読み手に想像力的なものを喚起する言葉の仕掛けを）、一個の暗喩から、数ページにわたる文章のかたまりのような、さまざまなレヴェルにおいて表現する、それが想像力の側面から見た、小説の具体的な書き方である。僕はこのようにさまざまなレヴェルでのイメージを、小説の散文の流れのうちにはつきりと分節化することを、小説の方法としたいと考えている。その分節化されたイメージのブロックを、意識的に構成してゆくことを、具体的な小説制作の方法とみなしたいのである。

これは、まさしく『万延元年のフットボール』におけるさまざまなレヴェルの恥の頻出の謎に対する答えとなりえないだろうか。

そう理解すれば、「恥」という語の度重なる使用は、きわめて意識的な操作によってなされたのであり、想像力的なものを読み手に喚起するために、さまざまなレヴェルの「恥」が分節化されて配置されているのだと了解できる。

(c) グロテスク・リアリズム

大江はグロテスク・リアリズムのイメージ・システムを小説の方法に取り入れる有効性を唱えるのだが、それは「ある分節化されたイメージ、その文学表現の言葉による仕掛け、しぐみを、グロテスク・リアリズムのイメージ・システムに照らしあわせることで、それをさらに活性化させつつ展開することができ¹⁴」からだという。

そのグロテスク・リアリズムとは、いったいどのようなものであるのか。大江も『小説の方法』¹⁵のなかで引用しているバフチンの文章を次に掲げる。

○グロテスク・リアリズムの主要な特質は格下げ・下落であって、高位のもの、精神的、理想的、抽象的なものをすべて物質的・肉体的次元へと移行させることである。

○格下げ・引き落としとはこの際地上的なものに向かうこと、一切を飲みこみ、それと同時に生み出す原理としての大地と一体化させることを意味する。

(略) 下落とは同じく肉体の下層の部分の生活、腹の生活生殖器官の生活に参与することであって、それ故に交接、受胎、妊娠、出産というような行為に参与することである。

『万延元年のフットボール』のなかでも、いくつかグロテスク・リアリズムに該当する事柄が出てくる。

例えば、森の林道で排泄する子供、谷間の肉体派の小娘、癒されることのない飢えと戦う「日本一の美女」ジン。そして、小説の要所要所に配された性的な事件。

さらに「異化」された文章のなかで、盛んに用いられる肉体・生物にたとえた比喻表現の数々。例えば、犬、毛細血管、腔腸類、ネズミ、薔薇色の細胞、脳髓の脂肪質、腐蝕した歯、鱗片など、あげだせばきりがないほどである。

また、語り手の蜜が何かのショックを受けた場合の心理描写は「(肉体・内臓)が〔変調した〕ように」という文脈でなされることも注目に値する。

○内臓を搾られるような嫌悪感に襲われて (二七五ページ)

○生なましく即物的な恐怖の味が乾いた口腔によみがえって (三一四ページ)

○有毒の煙を吸いこんだような具合に気管をいがつぼく熱くして、嫉妬心が実在しはじめる。(三五八ページ)

○具体的な嘔気までたかまる嫌悪感と恐怖（三八〇ページ）

○肉と骨がばらばらに孤立して重く感じられ、鈍く痛んでいる僕の肉体（三九一ページ）

これらの表現が「異化」されたものであることは断言してもよいと思うが、同じく「恥」の語の使用されている文脈も、「異化」の意図の認められるものが少なくない。

○それに巻きこまれば恐怖と恥辱感のために躰全体の毛穴から忌わしいムク犬の剛毛が生えてくるほどのスキヤンダル（三九ページ）

○羞恥心がネズミそっくりの僕の躰じゅうの毛細血管の隅々みまで浸透して賤しく発熱させる（一八四ページ）

○それは、精神の内奥の赤く充血した粘膜の襲みたいなもつとも恥かしい部分をくりかえしくすぐってくる、緊迫しながらなお快楽的な昂奮のひそんでいる喚声である。（二八一ページ）

これら、周到な言葉の仕掛けを小説の細部にほどこ

すことにより、大江は何を読み手に伝えたかったのであろうか。そのことを探るのが本稿の目的であって、多少まわり道をして、大江の方法論をとりあげたのは、以下の論に裏付けを得たいと願ったからである。さて、本筋に戻ろう。

(4) 独特な人間

先に「恥」に対する語として「威厳」を得た。しかし、「恥」は繰返され、「威厳」は表面上の言葉のレベルでは見当たらない。大江が自分のモラルの世界の基本的な用語として並列しているものでありながら、価値的には対極に位置する二つの概念。それが一方では圧倒的な量であらわれ、他方はまったくの不在。

ここで不在と言いきってしまつてよいだろうか。「威厳」あるいは「威厳のある人間」という意味をもつ語が出てはこなかったか。すなわち、「異化」された文学表現の言葉で「威厳」に代替しうる語。

そう考えながら読みなおした場合、「独特な人間」という呼称が浮かびあがってくる。

「独特な人間」が最初に出てくるのは、死んだ友人についての蜜と鷹の会話のなかであり、鷹の口から出

たその言葉を蜜は「かれの死を悼むにたる言葉」とう
けとめるのである。

その後、四人の人物にこの呼称は与えられる。妹、
鷹、スーパー・マーケットの天皇、S兄さんの四人で
ある。それぞれ「独特な人間」と呼ばれた箇所を次に
あげておく。

○「友達が自殺したことは聞いたかい？」

「聞いたよ。あの人はどこか独特な人だったね」

(略) 縊死した友人にとつて単なる他人にすぎない
人間の口から、はじめて僕はかれの死を悼むにたる
言葉を聞いた。(六四ページ) *傍線は引用者による

○「妹は白痴だったが、本当に独特な人間だった
(略)」(三八九ページ)

○——(略) 弟さんのことは、本当にお気の毒でし
た。痛ましかったねえ、あの人は独特な青年でし
よ！(四一七ページ)

○鷹四は(略) 実はこの朝鮮人に強い印象を受けた
のであり、かれに向つてあなたは独特な人間だ、と
語りかけたことがあるのだらう。いまスーパー・マ
ーケットの天皇は、死んだ鷹四からの賞め言葉への
ひそかな返礼として、同じ形容を用いたように感じ

られる。(四一七ページ)

○——軍隊から戻った兄さんが死んだ時のことね
え、(略) いわば、われわれと日本人とが共同で撲
り殺したですよ。あの青年も本当に独特な人間だっ
たなあ！(四二四ページ)

こうやって並べてみると、「独特な人間」とは鷹四
にとつて、おそらくは最上級といつてよいほどの讃辞な
のであり、大江がこの言葉に明らかに正の意味を持た
せようとしたことがわかる。

(5) 威厳ある生にむけて

大江は『万延元年のフットボール』構想中、おそら
くは「明治についての一連のささやかな読書計画」の
途中で、二葉亭四迷の「僕は人に何らかの模範を示し
たい……なるほど人間といふものはあゝいふ風に働く
者かといふ事を出来はしまいが、世人に知らせたい」
という言葉に出会い、感銘をうけたらしい。

また『万延元年のフットボール』の最初の構想は、
二葉亭の言葉に触発された部分が少なからずあつたこ
とも、エッセイ『同時性のフットボール』を読めばわ

かる。^⑤

それにしたがえば、当初の構想では、小説の冒頭で既に鷹四は「汚辱にみちた死」をとげており、蜜は死んだ弟の再発見の旅に、決して弟の核心に触れることはないだろうと確信しつつも、旅立つはずだった。

弟の死の「根本的な種子」を知るといふ「僥倖」を信じずに探索の旅に出る兄。大江によれば、「僥倖を嫌悪する者のみが、そのように絶望的な旅に、威厳と共に出発する」のだ。

また、大江は当初蜜三郎をモラリストとして設定していたようだ。もちろん最終稿の蜜にその面影はないのだが、かわりにモラリストの性格をもつ人間が、ひとりだけ小説世界に生き残ったという。それが縊死した友人である。この登場人物について、大江は次のようにコメントする。

人はなぜ自殺するか。それはもつとも絶望的な局面において、生き残るべき他人たちに、「なるほど人間といふ者はあゝ、いふ風に働く者か」ということを知らせるためである。

このような一面をもつ縊死した友人、彼に「独特な

人間」という呼称が冠せられ、その後四人に受け継がれてゆく。このことは「独特な人間」が「威厳」ある人間であることの傍証とならないだろうか。

威厳と共に絶望的な旅に出発する人々。「独特な人間」と呼ばれる五人のうち四人までが自殺者であることが、「独特な人間」威厳ある人間」の図式をわかりにくくしている。大江の語ろうとした「威厳」が一般にいう威厳の範疇から、はずれているためだ。

しかし、かれが広島で見出した「威厳」とは、絶望的な局面に、その人なりのやり方で立ち向かうかれらの姿そのものであったことを、考慮すれば、「独特な人間」と広島の威厳ある人々とは、同一とは言えないまでも、ごく近い存在なのだと思ふべきよう。

振り返ってみれば、下降生活における蜜三郎は友人の死の正当な理由を理解することを切に望んでいた。蜜にとって「朱色の塗料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこむ」という「奇怪な衣装での死を生みだしたあるもの」の存在に近づくことは、何よりも優先することだったのである。

鷹四の死後、倉屋敷の地下倉が発見され曾祖父の弟の後半生が明らかになってからは、さらに鷹四と曾祖父の弟についても再審せねばならなかった。新しい

構図のなかでは、鷹四も曾祖父の弟も「地獄を正面からひきうけ乗りこえてゆく恐ろしい人々」、すなわち威厳ある人間として蜜に正当に認識されるのである。

蜜にとって、「独特な人間」たち、「自分の地獄を乗りこえた者たち」の示した絶望的局面における「威厳」は、これからの人生の指標となることであろう。「汗と土埃りに汚れたアフリカ生活」の果てに、蜜が「威厳」をかちとるのかどうか、小説は語らない。

しかし、小説の結びの部分の透き通るような明るさは、それ以前には見られなかったものであり、蜜の再生を如実にあらわしている。蜜が「うしなわれた期待の感覚」を取り戻す日も近いのかもしれない。

注

- (1) 本文の引用は、すべて講談社文芸文庫による。
- (2) 三〇六ページ以降、集団的な谷間の村平等の恥はかつこのついた「恥」と表記されている。
- (3) 『ヒロシマ・ノート』岩波新書（岩波書店、一九六五年）
- (4) 『ヒロシマ・ノート』九七～九八ページ
- (5) 『ヒロシマ・ノート』九八ページ
- (6) 『小説の方法』岩波現代選書1（岩波書店、一九七八年）
- (7) 『小説の方法』は、『万延元年のフットボール』よりも、後年のものだが、大江の基本的な姿勢はかわらず、ただロシア・フォルマリズム、バフチンらから理論の裏付け

を得たのだと、私は考えた。

- (8) ヴィクトル・シクロフスキー「手法としての芸術」（新谷敏三郎・磯谷孝編訳、『ロシア・フォルマリズム論集』、現代思潮社、一九七一年）一一七ページ

- (9) 『小説の方法』七一ページ

- (10) 『小説の方法』八六ページ

- (11) 『小説の方法』八七ページ

- (12) 大江の用いる「分節化」の定義は、

すなわち、多様なレヴェルにおいて、はっきりとしたまとまりをなすある部分を他からくつきりと分離して把握し、全体へのつながりを考えるという意味に、僕はそれを用いる。（『小説の方法』八ページ）

- (13) 『小説の方法』九九～一〇〇ページ

- (14) 『小説の方法』一二五ページ

- (15) ミハイル・バフティン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（せりか書房、一九七三年）二五～二六ページ

- (16) 『持続する志』全エッセイ集（文藝春秋、一九六八年）四〇三～四〇八ページ。